

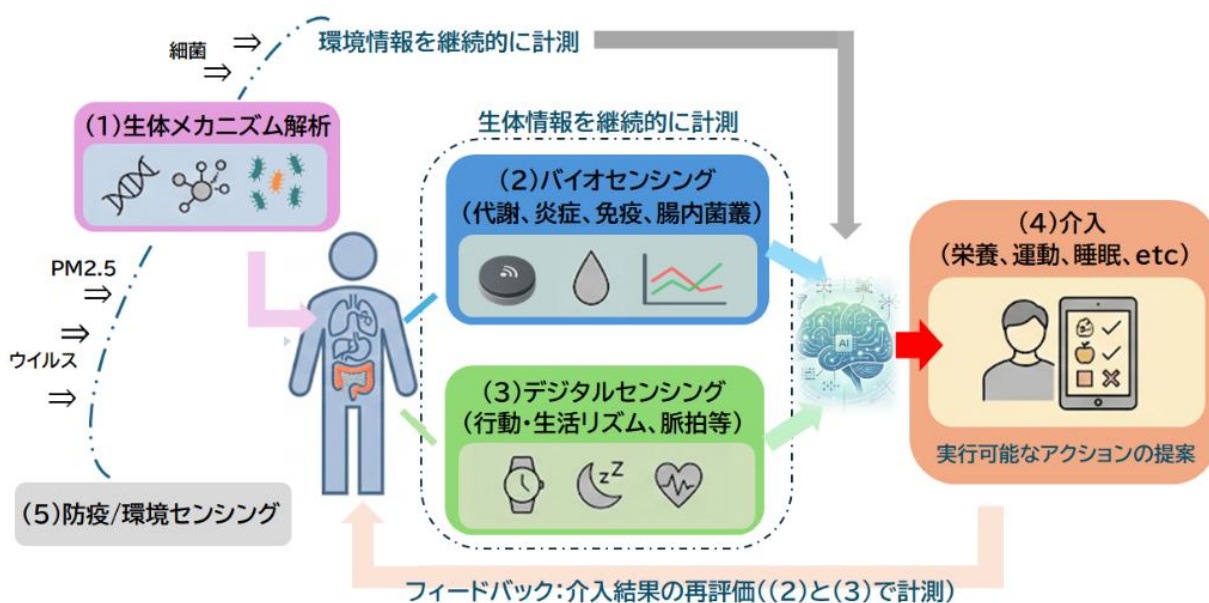
# Innovation Outlook 速報 第11弾

## 「高度センシングによる先制ヘルスケア」領域

2026年5月14日

### 生体や環境の日常を捉える高解像度センシングにより 先制ヘルスケアを実現する

- 高齡化の進展や慢性疾患の増加を背景に、ヘルスケアエコノミーは、治療中心から予防・健康増進を軸とする構造への転換が求められている。日本では、健康寿命の延伸や医療・介護負担の抑制、新産業の創出の観点から、先制的なヘルスケアの重要性が高まっている。
- 画一基準に基づく年に数回の検査は、疾患の早期発見に寄与してきた一方、日常行動と健康状態の関係が可視化されにくく、行動変容が持続しにくい課題がある。そのため、行動の影響を継続的に捉え、介入と評価を循環させる個別最適型の健康支援モデルが求められている。
- その中核は、精密栄養を基盤とする高度なバイオ／デジタルセンシングである。健康状態に有効なバイオマーカーを特定し、連続的かつ高精度な非侵襲・低侵襲技術により、日常的に負荷をかけずに計測することで、多元的データを解析し、個々の状態に応じた介入と再評価を行うデータ駆動型フィードバックループを形成する。
- さらに、防疫／環境センシングを組み合わせることで、個人の行動の最適化と社会レベルのリスク低減を同時に図る「先制ヘルスケア」が実現する。関連技術やデータ基盤に強みを有する日本において、本領域の国際展開が期待される。



生体・環境情報の継続的センシングが実現する先制ヘルスケアの個別最適化

執筆者: NEDO イノベーション戦略センター バイオエコノミーユニット 味方 和樹、石倉 峻